

タイ人と魚の距離感から考える生物多様性

友 尻 大 幹 *

チャオプラヤ川はタイ北部の高地を起源とする川で、全長約 372 km、流域面積約 160,000 km² の大河川である。タイの北部から中部にかけて流れ、首都のバンコクを流れて最後はタイ湾に注ぐ [Molle 2007]。「水に魚あり、田に米あり」といわれるように、チャオプラヤ川には 2 cm 程度で成魚になるハゼ *Gobiopterus chuno* や、小型から大型のコイ類やナマズ類、最大 400 kg を超える淡水エイ *Himantura chaophraya* まで 300 種を超える多様な魚類が生息している [Kottelat 1989]。

バンコクを含む複数の都市が位置するチャオプラヤ川の下流域は広大なデルタを形成している。かつては洪水を繰り返すただ広大な後背湿地であったチャオプラヤデルタは、19 世紀後半に人の手によって縦横無尽に無数の運河を掘ることで稲作と居住が可能な空間へと変化した [高谷 1982]。現在では、経済発展と開発の影響を受けて急速な都市化が進んでいる地域でもある。

チャオプラヤ川下流域の魚類資源が豊富な背景もあり、かつてよりその流域の住民たちは日常的に魚類資源を利用してきた。タイの魚醤であるナンプラーや、ナギナタナマズ類からつくられた練り物、カレーや干物など、

その利用方法はさまざまである [公益財団法人長尾自然環境財団 2013]。東南アジア有数の大都市であるバンコク周辺でも、地元住民の人々が食べるための魚を運河のような身近な水辺で採集している光景を容易に目にすることができる。

私はこのチャオプラヤ川下流域の外来魚について研究している。外来魚とは「意図的もしくは非意図的に本来の生息域外に人為的に移動させられた魚種」のことであり、日本ではというブラックバスやブルーギルがよく知られている。研究内容は外来魚が在来生態系へ及ぼす影響や住民による利用状況を明らかにするというものであり、フィールドでは主に生物の採集や地元の人々への聞き取りをしている。

外来魚は生物の絶滅を引き起こす要因のひとつとして認識されており、外来魚研究とは生物多様性の保全や重要性について考えるテーマでもある。当然、私も外来魚研究を通して生物多様性の重要性について考えている。そしてその中でいつも悩むことのひとつが、生物多様性の重要性をいかに一般の人たちに伝えることができるのか、ということである。多くの研究者や専門家は生態系サービスなどといったさまざまな理論やモデルを並

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

べてその重要性を指摘するのだが、一般の人たちが十分に理解できるように説明できているものはないように私は感じている。そんなことを考えている中で、タイにおけるフィールドワークは生物多様性の重要性を理解するうえでのヒントを教えてくれた。それは、本来あるべき人と生物の距離感である。

タイ人ドライバーの採集技術と識別能力

私の研究は魚が対象で、まずは魚を採集しないことには何も始まらないので採集に出かける。調査にはいつも同じタイ人が同行してくれる。採集日の朝、彼と合流してその日の採集候補地点を地図上で確認したら最初の採集地点に車を走らせる。

調査地点に着くと水質を測ったり周囲を観察・写真撮影したりした後に、魚の採集を開始する。投網を地上から投げたり、刺し網をはったり、時には茶色く濁った水に首まで浸かりながらタモ網やサデ網を用いてありとあらゆる魚を採集する。この時、ドライバーがいつも採集を手伝ってくれるのだが、彼がとつもなく魚をとるのが上手い。研究者の知

り合いに魚の採集が上手い人はいくらでもいるが、彼にかなう人はいないだろうと思う。

ある日、私が投網を投げようとしていると、ドライバーが「まだだ!」と言った。そして数秒水面を見回して「今だ!そこに投げろ!」と言うので言われるままに投網を投げると驚くほど多くの魚が入っていた。

彼は普段、市場で鶏肉を売っており漁業を専門としているわけではない。彼曰く、「タイ人は魚を食べるから、みんな子どものころに魚をとったことがある。こんな所作は特別なことではない」とのこと。私も魚の採集に自信はあったのだが、何食わぬ顔で次々と魚をとる彼を見て採集技術に自惚れていた自分が恥ずかしくなってしまうほどであった。彼らにしてみれば魚をとるなんて庭の畑から大根でも抜いてくるようなものなのだろう。

また、彼は魚を見分ける能力にも長けている。採集した魚の種類名をその場で全て言い当てるのである。もちろん学名を言い当てるわけではないが全ての魚種にはタイ名があり、これまで数十種の魚を採集したが彼はそれらを見て瞬時に名前を言い当てることができた。時には「これは美味しい魚だから少し分けてくれ」とまで言ってくる。地元の人間なのだから当然だろうと思うかもしれないが、身近な魚の和名を言える日本人がどれだけいるだろうか。おそらくかなり生き物が好きな人でもない限りほとんどの魚の名前を知らないだろうし、ましてやそれが美味しい魚かどうかなんて知る由もないのではないか。

彼の能力は天性のものでもなければ必死で資料から得たものではない。魚をとるのが上



写真 1 投網を投げるドライバー

手いのは、それが自らの食料になるからである。魚の種類を知っていることは、それが食べることができる魚なのか、危険な魚なのか、といった利用するうえで必要なことである。つまり彼の能力は生きるうえで自ら日常的に食べるものを得るうえで必要な能力であり身近な環境にいる生き物を食べるうえで自然と得た術なのである。

地元の人々とのやりとり

フィールドで魚を採集していると、見慣れない外国人が魚をとっては奇妙な器具で計測したり謎の液体に漬けたりしているので、興味をもった地元の人々がわらわらと私を見に集まってくる。その際に、彼らはその水域のことやそこで採集できる魚のことを教えてくれるのだが、その詳細さにいつも驚かされる。

私は自分の研究の一環で胃内容物の分析をしている。要は胃の中身を直接観察して研究対象魚が自然下で何を食べているのかを調べるのである。80%のエタノール中に保存されている魚の胃を解剖し、さまざまな餌資源の出現頻度と体積比を算出する。この方法によって、対象の魚にとってどの餌がどのくらい重要なのかを分析することができる。私の研究はナイルティラピア (*Oreochromis niloticus*)、モザンビークティラピア (*O. mossambicus*)、そしてマヤンシリッド (*Mayaheros urophthalmus*) という3種の外来魚を対象としている。ざっくりとした胃内容物分析の結果を示すと、前2種はほとんど底生の堆積物を食べており稀に付着藻類を食べていた。残りの1種は主に魚の鱗と底



写真2 調査地における聞き取り調査の風景

生堆積物を食べており、あとは小型のエビやカニ、貝類といった水生の無脊椎動物を食べていた。

フィールドで地元の人たちと話していると、こうした分析から得られた魚の生態をことごとく言い当ててくるのである。とれた魚を目の前に「この魚は他の魚を追いかけてまわして、鱗を食べているのを知っているぞ！この魚はエビとか貝を食べているだろ??」と次々と教えてくれるのだが、それらは科学的な分析と完全に一致しているのである。

彼らは私と同様の分析をしたわけではなく、ただ毎日水辺を見たり魚を食べたりしてそのようなことを知るのだろう。彼らが水辺に注意を向けているのは、やはり自分たちが利用する生き物がそこに生息しているからである。どの魚が美味しいのか、どこに魚が多く集まっているのか、そういったことを見て考える中で自然と体得するのである。

タイ人の魚との距離感から考えること

私がタイ人ドライバーの採集技術や識別能力、地域住民の人々の観察眼に驚くのは、そ

れが特別なことだと感じたからである。しかし、それは彼らにとっては生きるうえで当然もっている能力であり、何も特別なものではない。彼らは身の周りの環境にある資源（生き物）を利用しているだけである。おそらく、その状態は環境や生物相の変化に伴って動的に変化しながらも脈々と維持されてきた人と魚（生き物）の関係である。そして私は、この人と生き物の距離感こそが生物多様性の重要性に関わるヒントであるように考えている。

生態学では、ある生物が別の生物の生活に及ぼす影響のことを（生物）相互作用という。生物多様性はその生物相互作用によってつくられるネットワークのうえに成り立っており、その構成員である生き物たちは直接的・間接的に全てが関わりあって生きている。そしてフィールドで魚を利用するタイ人を見ていると、このネットワークには人もまたその中に属しているということに気づかされるのである。つまりは、人もまた生物相互作用のネットワークの一部を担っており、そのネットワークに属しているからこそ生きることができるのだ。

日本に暮らしていると、この本来あるべき

生き物と自分たちの距離感を知ることはとても難しい。しかし、自分たちも生物ネットワークに含まれているというその距離感をイメージすることができた時に、生物多様性の重要性が少しは伝わるようになるのではないだろうか。

これは、対象の生物に固執せずに地域全体を見渡すフィールドワークを行なったからこそ気づくことができたことである。これから生物多様性について、フィールドでの実体験から考えることを続けていきたいと強く思う。

引用文献

- 高谷好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展』創文社.
- Kottelat, M. 1989. Zoogeography of the Fishes from Indochinese Inland Waters with an Annotated Check-list, *Bulletin Zoologisch Museum* 12(1): 1-55.
- 公益財団法人長尾自然環境財団. 2013. 『メコン河流域水辺の幸 インドシナ市場図鑑』.
(http://www.nagaofoundation.or.jp/publication/documents/mizube_1.pdf)
- Molle, F. 2007. Scales and Power in River Basin Management: The Chao Phraya River in Thailand, *The Geographical Journal* 173(4): 358-373.